



連載15回

志茂田景樹の「あのころ……」

# ガリ版のバイトで稼ごうとした夢は潰えて

志茂田景樹（作家・40年会会員）

1960年代には充分に需要があった業界で、中大周辺にもいくつかが店舗を構えていたが、いつの頃からか消えていった業種がある。

もしかしたらアート系で特殊な需要があつてどこかごく一部が生き延びているかもしれない。

その業種は孔版印刷業である。もつと通りのいい名称で言えば、謄写版印刷業になる。さらに碎けて言えばガリ版という名称で親しまれていた。

ヤスリ板に口ウ引きの原紙を置いて鉄筆でガリガリ字を切ると言え、白門40年会のメンバーなら、俺も切った、私も切った、と覚え

のある人もいよう。小、中、高時代は学級新聞や、部の会報はガリ版刷りだった。

僕らの世代が大学に入った頃は、この孔版印刷技術が頂点に達したときで、社内報や、同人誌などは活版印刷のそれよりも出来栄えが美しいものが多かった。表紙絵や、挿絵を鉄筆で切って仕上げるという味わいのものになった。

その頃、図書館に近い門の向かいに法経書専門の小書店があり、その並びに孔版印刷店があつた。筆耕者募集の張り紙を見て応募した。熟練したガリ版の筆耕者はい報酬を得ていたので、効率のいいバイトになると思い込んでのこ

とであつた。

採用され、毎日、2階の和室の筆耕ルームに出動した。そこには10人前後の筆耕者が机を並べて絶え間なくガリガリ原紙を切っていた。細字をゴチックや、明朝で切るときはカリカリと澄んだ音になる。

僕の音はガツガツで、これは初心者はみんなそうである。数日で僕は鉄筆で原紙を切る音ノイローゼになった。夜、寝ていても、突然、ガリガリカリカリの合奏が耳許で聞こえて飛び起きた。無断欠勤を続けてそのまま辞めてしまった。道でその店のベテラン筆耕者と出会った。

「気にしないでいいよ。残るのは

10人に1人もいないから」

日給計算で給料が出ている、とも教えてくれたが、取りにいくことはなかった。



「アルバイト募集」が貼られた中庭の掲示板